けるオオミネテンナンショウとの関係を考慮すると，独立種という見解に賛成である。

Arisaema aprile J. Murata, Journ. Jap. Bot. 58: 29 (1983).—*A. nikoense* from. *variegatum* Sugimoto, Fl. Shizuoka 486 (1967).

Hab. Honshu (Kanagawa and Shizuoka).

引 用 文 献

邑田 仁 1983. 植物研究雑誌 58: 29-32. 大橋広好・邑田 仁 1980. Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo III, 12: 281-336. 芹沢俊介 1981. 植物研究雑誌 56: 90-96. —— 1984. 日本植物分類学会会報 5: 42.

Summary

The classification of *Arisaema nikoense* s. lat. was revised on the basis of recent collections. The populations in the alpine regions of the northern Hida mountains and Mt. Hakusan were described as a variety of *A. ishizuchiense* subsp. *brevicollum*. The populations in the alpine parts of Mt. Kitadake were described as a variety of *A. nikoense* subsp. *nikoense*. The specimens from Hakone and Mts. Tanzawa were referred to *A. aprile*.

□福代康夫（編）: **貝毒プランクトン — 生物学と生態学** 125 pp. 1985. 恒星社厚生閣，東京，￥1600. 日本水産学会は大会時に開催のシンポジウムをまとめ，水産学シリーズと銘打って成書を刊行している。本書はそのシリーズの56号である。ムラサキイガイ，カキ，ホタテガイ，アサリなどの貝を食べて中毒を起したという記録は古くからあるが，貝毒に下痢性とまひ性があり，前者の原因は植物プランクトンである渦鞭毛藻の *Dinophysis*, 後者のそれは同じく渦鞭毛藻の *Protogonyaulax* によることがわかったのはここ数年のことである。本書は，執筆者14名で，10章から成り，前半は上記藻類の分類，分布，増殖，生活史等を扱い，後半はケーススタディの形式で，北海道，陸奥湾，三陸沿岸，鹿島灘，紀伊半島西岸域および山口県日本海沿岸における貝毒プランクトンの生態を中心とする研究成果を収録する。貝毒プランクトンは貝類毒化の原因生物として水産業界や保健衛生の分野で格別の注意が払われているが，またプランクトンが生産する生理活性物質の医薬用への実用化の面で最近新たな注目を浴びつつある。有毒プランクトンについてさらに知見を得たい読者には，同じ出版社から刊行の日本水産学会編「有毒プランクトン」(136 pp. 1982. ￥1600) の併読を奨めたい。 (千原光雄)